

猪の瀬戸の歴史シリーズ①

## 交通の要所だった猪の瀬戸

別府から堀田を経て猪の瀬戸をとおり湯布院から太宰府に至る重要な道が通じていたことが知られている。

また、十文字原から塚原を抜けて猪の瀬戸へ通じる道もあった。

東畑村（現東山付近）の絵地図によると鳥居から東畑村小杉、中居を経て、椿村の城島や合原から猪の瀬戸に入る道と、東畑村片山を経て猪の瀬戸へ入る道があり、鳥居からは枝郷へ、小杉からは合棚や椿を経て庄内へ通じていた。

これらの古道が現在の道路の元になっているようだが、いつごろまでどのような道であったかははっきりしない。交通の要所であっても、山中を抜

ける道は危険を伴っていたことが想像される。現在、湿原の中にある祠には、安全祈願のための地蔵様が残されている。（写真1）苔むして年号などを読み取ることができないが、随分昔のものであろう。野焼き再開に向けた輪地切りをしていたところ草むらの中から見つかった。傍のサクラの木が成長して傾いているが、重くて人力では直せない。 ———— この記事は昭和59年版・別府市誌による ————

地蔵様の正面には水口川が流れ、川に沿った山道には石積みが見られる。（写真2）かつての「ゆふいんみち」であろう。ここを100mほど西へ進むと水口川を渡る橋が架かっていた橋畔の石積みが残っている。（写真3）石積みの幅は約4m、高さ1.7mで長さ8.7mほどの木製の橋が架けられていたのではないかとと思われる。湿地の中央を避けて周辺を取り囲むような道が、かつて存在していた証となる史跡である。

このように、猪の瀬戸は昔の人が別府、湯布院、庄内、塚原、さらには太宰府、府内、安心院、豊岡へと足を運ぶ交通の要所であった。

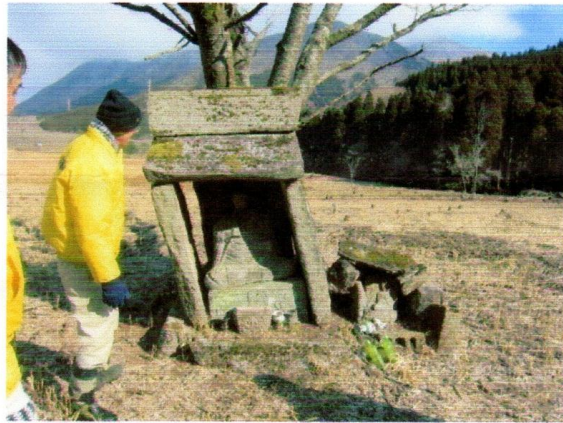


写真1. 草に埋もれていたお地藏様



写真2. 山道に造られた石垣



写真3. 橋畔の石積み